京都大学若手人材海外派遣事業　ジョン万プログラム（職員派遣）
平成２８年度事務職員短期派遣プログラム報告書

（研修者）
職名：京都大学医学部附属病院医務課　主任
氏名：小田　真玄

（研修先等）
渡航先国名　：タイ王国
研修先機関名：京都大学 ASEAN 拠点
研修期間　　：平成 28 年 10 月 3 日～平成 29 年 3 月 29 日

（具体的な研修内容）

１．概要
平成 29 年 10 月から平成 29 年 3 月までの半年間、本学の ASEAN 地域における研究、教育活動の支援、教職員・学生の国際化、広報・社会連携・ネットワーク形成を支援するため、タイ王国・バンコクにある本学 ASEAN 拠点における業務に従事した。本学の若手人材海外派遣事業ジョン万プログラムで ASEAN 拠点に派遣された職員としては 9 人目となる。
現地では、主に、拠点スタッフの出張手続き、拠点所長及び現地スタッフの勤怠管理、学内会議、打ち合わせ用資料作成及び各種調整業務等の拠点運営にかかる総務業務、拠点運営経費等にかかる会計処理業務を担当した。
他にも、大使館主催の留学フェアへの参加、タイに海外事務所を置く日本の大学による連携組織「在タイ大学連絡会(JUNThai)」の運営、現地大学への訪問、在ミャンマー日本大使館及び JICA ミャンマー事務所への訪問、インドネシア・マランで開催した「第 6 回東南アジアネットワークフォーラム」に出席し、305 名の参加者を前に、ASEAN 拠点の活動紹介を行った。
さらに、ジョン万プログラムの趣旨にもある語学力・コミュニケーション能力の向上のため、渡航期間中の経費補助制度を利用し、語学学校に週 3 回通い、英語能力の向上に努めた。

２．ASEAN 拠点運営業務
赴任期間（平成 28 年 10 月から平成 29 年 3 月）における ASEAN 拠点の体制は、拠点所長、URA(University Research Administrator)職員、事務職員、現地スタッフの日本人 3 名、タイ人 1 名の 4 人体制であった。
日常の拠点運営業務では、会計処理業務がメインであった。タイでは、日頃の消耗品からオフィスの賃貸料まで、様々な経費を現金支払いで対応するため、大学本部から外国送金される仮払金で運営を行っており、本学の会計規程に則った厳格な運用が求められるため、取引業者や商店等との交渉をはじめとする会計業務に明け暮れた。
特に、取引業者や商店等、タイの方々とやり取りする際には、タイ語しか通じないケースが多かったため、拠点の現地スタッフに英語で説明し、英語からタイ語に通訳してもう

必要があった。日常業務における現地スタッフとの英語でのコミュケーションを通じて、語学能力の向上を実感し、逆に、英語での意思疎通の難しさにあらためて気づかされることが多々あった。英語でのコミュニケーションの困難さに直面した際にも、拠点所長やURA職員のフォローや助言のおかげで、それらを語学力向上のモチベーションに変え、より一層、英語の学習に打ち込むことができたと感じている。

さらに、実際に現地スタッフと銀行、郵便局、その他商業施設に出向き、交渉することを通じて、タイの商慣習やタイ人の気質にも触れることができたと感じている。

３．イベント対応、出張等

(ア)地方留学説明会への参加

渡航期間中に在タイ日本大使館主催の地方留学説明会（①平成 28 年 11 月開催、タイ・ピサヌローク②平成 28 年 12 月開催、タイ・コンケン③平成 29 年 1 月開催、タイ・ソンクラー）に参加した。

地方留学説明会では、はじめに学校紹介、その地方の初等・中等・高等教育を取り巻く環境、日本語教育環境等について説明があり、訪問した教育機関の中には、学生が地方に伝わる民族舞踊、音楽などを披露し歓迎してくれる学校もあった。教育現場を実際に見せていただく機会もたくさんあり、初等教育機関で子供たちが日本語の授業を熱心に受ける様子や工業系の学校で学生が精密機械を真剣に操る様子を視察した。視察先の工業系高校の校長先生からは、日系企業に限らず、外国からの企業誘致が進み、学生たちにそこで仕事をするために必要な技能、語学力等を身につける環境を如何に提供してあげられるかを常に考え、試行錯誤しながらも少しずつ前に進んできたとのお話をお聞きした。外国企業の地方都市へのビジネス展開が教育現場にも影響を及ぼしていることを実感すると共に、このような環境下の学生たちに、本学への留学に関する説明を行うことに対して、身の引き締まる想いがした。

他の参加大学、日本学生支援機構(JASSO)の説明では、各大学の特色、留学案内、入学方法、英語のみで修学できる学部・研究科、奨学金を含む支援制度、先輩の声等、趣向を凝らしたアピールがなされ、学生たちも真剣に聞き入っていた。他大学はタイ人現地スタッフがタイ語でのみ説明を行っていたが、本学では、前半に私が英語で、後半に現地スタッフがタイ語で説明するという形をとった。人前で英語を話す機会はこれまで少なかったため、本学の留学制度の下調べ、事前準備等も含めて、とても貴重な体験となった。

今後の課題は、地方の教育を取り巻く環境や訪問先の教育機関によって異なる学生の規模・レベル、さらには、各種専門系学校などに応じた説明ができれば、より一層学生の関心を惹きつけるプレゼンテーションができるのではないかと感じている。

(イ)在タイ大学連絡会の運営

在タイ大学連絡会(JUNThai)はタイ国内に海外拠点事務所（連絡事務所含む）やセンターを設置している日本の大学間での情報交換、活動の相互連携、また、タイの大学等に対する

情報発信、そして現地に勤務する教職員の親睦を図るための緩やかな連携を目的として設置された組織である。平成 29 年 3 月時点で 39 大学が加盟しており、その他の政府系関連機関、学術関係機関、未加盟の他大学もオブザーバーとして参加している。

平成 28 年 4 月から平成 29 年 3 月の間、本学は 4 校で構成される幹事校一校として、3 ヵ月に 1 度開催される定期連絡会に関連する事務（講演テーマの決定、講師への依頼、会場手配、当日準備等）及びその他総務事務を行った。他の幹事校が教員 1 名、またはそれに加えて現地スタッフ 1 名の計 2 名で構成されていることもあり、実質的には、在タイ大学連絡会に係るすべての業務を本学のジョン万プログラム職員が担当している状況であった。

在タイ大学連絡会では、他大学・関係機関の職員の方と交流を深めることができ、その他の業務でも、頻繁にお世話になり、助けていただいたことが多く、滞在期間中の業務をより円滑に進めることができたと感じている。

タイ国内に連絡事務所等を設置する大学が地方の都市にも増えてきており、今後は在タイ大学連絡会加盟校の増加が予想される。それに伴って事務量の増加が懸念事項となることが予想されるので、これを加盟校間で協力して解決していく必要がある。

(ウ)タイ国内の大学訪問及び周辺国の大使館及び学術関連施設への訪問

ジョン万プログラムによる研修の一環として、平成 29 年 1 月 12 日～13 日にチェンマイ大学を訪問、同年 3 月 13 日～15 日にミャンマーの在ミャンマー日本大使館及び JICA ミャンマー事務所を訪問した。

チェンマイ出張では、拠点所長及び JASTIP コーディネーターとともに、チェンマイ大学農学部及び STeP（サイエンスパーク）を訪問し、ASEAN 拠点及び JASTIP の活動を紹介するとともに、チェンマイ及び北タイ地域での農業政策分野における社会実装の実例、学術動向、産学連携等の状況について説明を受けた。また、JASTIP シンポジウムへの参加を依頼し、快諾をいただき、先方からもイベントでの新たなコラボレーションの可能性について打診をいただいた。直接、お会いして関係構築する中で、新たなネットワーク、コラボレーションの可能性が次々と生まれていく生の現場を目の当たりにすることができたのは、貴重な経験となった。

ミャンマー出張では、URA とともにヤンゴンに 3 日間滞在した。出張の主な目的は、在ミャンマー日本大使館及び JICA ミャンマー事務所を訪問し、平成 29 年 12 月にヤンゴンで開催する「京都大学・ヤンゴン大学国際シンポジウム」の紹介及び吉田カレッジ構想（iUP）に関連してミャンマーの教育を取り巻く環境について情報収集をすることであった。URA とともに、両機関を訪問し、ASEAN 拠点の活動、ヤンゴンで開催するシンポジウム、京都大学吉田カレッジ構想について説明した。先方からシンポジウムでの協力依頼について快諾をいただき、また、ミャンマーにおける日本留学への関心、軍政後の初等・中等・高等教育の展開等について、説明を受けた。ミャンマーでは、日本留学への関心は年々高まってきており、その背景には日系企業の進出が目立つため就職先を学生が意識している事情がある、ミャンマーは高校までの教育課程が 11 年と国際標準（12 年）に満たない問題があるが、初等・中等教育を変

革して 12 年教育にしようとしている動きがあると説明を受けた。また、日本語の習得が日本への学部レベル留学のハードルとなっている現状があるが、吉田カレッジ構想のように日本語予備教育が担保されているプログラムは、日本留学へのハードルを下げ、より一層、本学留学への関心を高めるのではないかという貴重なご意見をいただいた。

今後、ASEAN 地域での学生リクルーティング活動や拠点運営業務に関する本部関連事務部署との連携、調整が求められていくことから、現地渡航前に職員への資料提供、事前説明、また、関連部署職員との顔合わせ等があるとより一層、業務が円滑に進むのではないかと思う。

(エ) インドネシア・マランで開催した「第 6 回東南アジアネットワークフォーラム」に参画

事務職員の拠点での実践的研修として、3 月 6 日～7 日にインドネシア・マラン市にある国立ブラウィジャヤ大学において開催された「第 6 回東南アジアネットワークフォーラム」に参加した。

本フォーラムはインドネシア在住の京都大学元留学生の同窓会組織であるインドネシア京都大学同窓会（HAKU）と連携して、ASEAN 拠点、東南アジア地域研究研究所、工学研究科が共催し、2 日間にわたって開催された。急速に都市化を遂げつつあるインドネシアの都市計画をテーマに議論され、合計 305 名の参加があった。

6 名の基調講演のセッションと併せて、スピーカーとして本学及び ASEAN 拠点を紹介する機会を得た。国際的な学術関連フォーラムで自分がスピーカーとして聴衆の面前に立つなど、ジョン万プログラムにエントリーした際には想像もしていなかった。英語でプレゼンテーションを行う経験すら数える程しかない私にとっては、非常に困難なミッションであったが、東南アジア地域研究研究所スタッフ、京大関係者、拠点スタッフの助言、フォローのおかげでなんとか対応することができ、非常に貴重な経験となった。

（本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック）

平成 28 年 10 月から半年間の ASEAN 拠点での研修を終え、研修成果をまとめるとともに、病院採用職員として今後病院の業務に従事する上で研修を通じて得た知見、経験をどう活用していけるのか、また、本学の一職員としてどういう心構えで業務に従事していくべきかを中心に考えてみたい。

ジョン万プログラムの趣旨にもある語学力・コミュニケーション能力の向上においては、一定の成果を実感している。渡航期間中の経費補助制度を利用した語学学校での学習のみならず、日常、英語の堪能な現地スタッフと英語でコミュニケーションを行えた事は語学力向上に非常に有用であったと考える。特に、経理関連業務において問題となっている事を現地スタッフに伝え、一緒に交渉策を練ったり考えたりする中で、語学力だけでなく英語で伝える訓練ができたと感じている。また、赴任した当初は、英文メールを一つ作成するだけでも苦労したが、照会文書への対応、外国人講師の招聘、宿泊施設の手配等で対応していく中で、以前に比べて抵抗なく行えるようになった。さらに、地方留学説明会、東南アジア

ネットワークフォーラムでのプレゼンテーションの経験は、人前で英語を話す自信にもなった。この点においては、現在、病院では外国人患者の通院、入院に対するサポート体制が充足しておらず、通常の患者への事務案内文書においても、すべてが日英で対応されていない現状があるので、それらを整備したいと考えている。また、他国立大学附属病院では、既に外国人患者専用のサポート部門を設置している医療機関も複数あり、部門設置を検討している大学は年々増加してきている。本院も外国人来院患者の増加に加え、国際的な病院として期待されている面を考えると、外国人患者サービス、サポートを充実させる専門部門設置への機運は高まってきているので、積極的に関わり、体制整備に貢献していきたい。

次に拠点運営において、経理業務、総務業務、人事管理業務等、一つの掛では決して従事できない業務をたくさん経験できた点を挙げたい。渡航前の掛では、縦割りに業務分担された運営になりがちで、自分の仕事がその後、どこにつながっていくのかを感じることができず、ルーチン化してしまう傾向にあったが、拠点で色々な部局の職員の方々と仕事をすることができて、遠隔地にいながらも、本学職員の一人一人のつながりをもって本学の運営がなされているということを実感することができた。特に、病院職員は専門的な知識を要求される仕事も多く、その習得には時間を要し、今後、同じ部署に相当期間いる可能性もあると考えられるので、ASEAN 拠点であらためて実感した本学職員の一人一人のつながりをもって本学の運営がなされているということを常に意識して今後の業務に取り組んでいければと考えている。

ASEAN 地域における学術振興、研究・教育支援、留学生誘致、ネットワーク形成等に最前線で奮闘されている拠点所長、URA、JASTIP コーディネーター、現地スタッフ、他関係者の皆様と仕事ができたことにあらためてありがたさを感じている。これから、本学職員として業務に従事する上で、何度も本研修で得られた知見、経験を振り返り、一つ一つの業務が本学の発展につながっていくという意識を持って業務に取り組んでいきたい。